

出来ないのである。そしてこのような理性には愛が対置される。理性は探し求め、愛は探すことなしに見出すのである。しかし理性の死は理性の放棄を意味しない。それは主従関係の逆転として理解される。理性に従うとは感覚経験に盲従して生きることであるが、愛が支配するようになった魂では、感覚認識能力としての理性が放棄されるわけではなく、感覚認識能力としての理性が純粹な奴隸として魂に従うようになるのである。

理性がこの世に関わる限定的能力であること、そして道徳的社会規範とでも呼ぶべきものであることは両者に共通する点であるが、ハデウエイヒが魂の完成の過程において理性と愛との相互補完的な関係を理想としているのに対して、ポレートが理性と魂の主従関係の逆転という独自のモチーフを展開している点に、両者の決定的な相違があると言える。

スピノザにおける無知としての奇跡

大野 岳史

スピノザは『神学・政治論』の中で迷信を批判する立場のもと新しい聖書解釈を提示しようとするのだが、この著作は神の啓示を批判する書と思われる。その理由の一つに「奇跡」についての見解がある。聖書解釈について論じる前に第六章「奇跡について」があり、スピノザは奇跡を迷信と考えていたと考えることができる。しかし『神学・政治論』の中では奇跡と迷信が結びつけられている箇所は一つもない。それではスピノザにとって奇跡とはいかなるものなのか。

迷信とは恐怖から生じるものであり、奇跡とはその出来事の

自然的原因を説明できない場合に「神の業」と呼ぶ習慣からくるものである。迷信のもとである恐怖から免れるために人間は奇跡に頼ってしまう。またスピノザによれば迷信は人間に自然と理性とを軽蔑することを教えるため、「自然と理性に矛盾すること」即ち自然を超えていることを奇跡と見做すのであれば、迷信が奇跡を生み出すと考えることもできる。

スピノザにおいて「奇跡」と「迷信」がともに関わる言葉に「無知」がある。オルデンブルク宛の書簡でスピノザは「奇跡即ちあらゆる悪の源泉である無知」(『書簡七三』)と言っており、また『神学・政治論』で奇跡を「その自然的原因を説明できないこと」としているため、奇跡は無知と同じことを意味していると思われる。ここで自然的原因とは実質的なものの存在や働きを決定する原因を指しており、目的因を念頭に置いているわけではない。むしろ『エチカ』第一部附録に見られる通り、自然的事物が目的因によって存在と働きが決定されるという考えは迷信である。すなわち目的因とは人間の空想したものという過ぎず、特にスピノザが目的因として挙げるのは「神の意志」である。しかしスピノザは「神の意志」を批判しているのではなく、自然的原因が分からないからといって同じく把握することができない神の意志に依存してしまうことに苦言を呈しているに過ぎない。だからこそここでの神の意志は「無知という避難場所」に他ならない。無知を基礎としても宗教を打ち立てることなどできず、むしろ信仰を迷信へと変えかねないからである。つまり無知は迷信のきっかけとなる。

無知が迷信を生み出すことについては、無知が恐怖をかき立

てることから明らかである。『エチカ』第三部定理一八備考二と第三部諸感情の定義一三で「恐怖」の定義が示されているのだが、そこで恐怖は疑わしいものの像から生じる変わりやすい悲しみとされている。したがって明晰には知っていないことに対面することで恐怖がかき立てられるのだ。また「像(imago)」も認識の不確かさに通じる言葉であり、なぜなら人間が誤謬に陥る認識は「想像力(imaginatio)」による認識の他にはありえないからである。

自然的原因についての無知が人々の精神のうちで恐怖をかき立て、その恐怖から免れるために目的因を空想してしまう。この場合、人間は迷信に囚われていると見做される。そして自然的原因が分からない出来事を神の業とし神の意志による結果であると空想したとき、人間はその出来事を「奇跡」と呼ぶ。このとき、無知には自然的原因に対する無知と目的因としての神の意志に対する無知がある。前者によって人間は恐怖をかき立てられ迷信に囚われてしまう。そしてこの無知をきつかけとして、後者の無知に惑わされた人は説明できない出来事を奇跡と呼ぶ。奇跡は自然的原因に対する無知を神の意志という別の知らないことで補おうとする空想である。したがって人間はその把握力の限界により無知から免れることはできないが、安易な想像によって判断しなければ「無知としての奇跡」という誤りに陥ることはない。

デウスからナトゥーラへ

——スピノザと十七世紀の改革派神学——

加藤 喜之

なぜ今、スピノザを問うのか。これは、十七世紀の過ぎ去りし初期啓蒙の問題ではないのだろうか。そして、啓蒙の問題は、ポストモダン哲学によって、超克された古くさいものではないのだろうか。現代の思想家や歴史家たちは、これらの問いに否と答える。ポストモダンと呼ばれる知的潮流がゆるやかになったいま、通奏低音として十七世紀末以降、現代まで響き渡る「近代」というものの問いなおしがなされている。歴史家たちによる「ラディカルな啓蒙主義」という知的試みもその一環である。これは、スピノザの思想がフランス革命につながる徹底的なデモクラシー運動の理論的支柱であったと論じるものである。

また、哲学の分野においても、アルチュセールやドルウーズ以降、マテリアリストとしてのスピノザへの注目があり、乗り越えられるべき重要な問題としてスラヴォイ・ジジエクやアラ・バデウなども、論駁を試みている。英米の分析哲学の分野においても注目を集めており、脳科学とスピノザの形而上学を調和させる試みなどもみられる。

このような一連の流れは、ポストモダニストたちが豪語したような近代の超克が、それほど簡単には、成し遂げられていないことを示している。教科書的な時代区分を超えた重要な問題が、十七世紀にデカルトやスピノザによってはじめられたプロジェクトには、実は、まだ残っているのではないだろうか。